〔東京家政大学研究紀要　第25集，p. 41～53, 1985〕

一般意味論の理論的基礎

横　尾　信　男

（昭和59年10月15日受理）

The Theoretical Basis of General Semantics

Nobuo YOKOO

(Received October 15, 1984)

1　一般意味論の位置づけ

1.1　言語の意味を対象とする学問は一般に「意味論」(semantics) といわれるが，通常それは「哲学的意味論」と「言語学的意味論」とに大別される[1]．カルナップ (Carnap, R.)やヴィトゲンシュタイン (Wittgenstein, L.) などの意味考察は哲学的立場からのものであり，ウルマン (Ullman, S.) やオグデン・リチャーズ (Ogden, C. K. & Richards, I. A.)，そして最近のライオンズ (Lyons, J.) やリーチ (Leech, G. N.) などの意味分析は言語学的な意味研究を代表するものである．また，言語の意味は，音声的な側面や統語的な側面の考慮なしには十分には把握できないとの認識から，言語構造の体系的な記述を目指す生成文法の一部門としての生成意味論も当然後者に属するものである．

さて，これらと区別され，新しい「第三の意味論」として注目されるものに「一般意味論」(general semantics) がある．それはどのような特徴を備え，どのような研究課題をもっているだろうか．言語の意味という共通の主題と，意味論という共通の名称とを持ちながら，一般意味論は従来の意味論とは関心の持ち方もアプローチの仕方もまったく異にしている．本稿では，そのちがいを踏まえながら，理論と方法をめぐって一般意味論の現代的意義を探ることにする．

1.2　ラパパート (Rapoport, A.) は研究対象と目標とに関して文法学，論理学，意味論と比較しながら一般意味論の独自性を次のように論じている[2]．

"Grammar deals only with word-to-word relations. It teaches how to put words together into a sentence. It is not interested in how sentences are related to each other or how they are related to facts. Logic goes further. To a logician, sentences are assertions, and he is interested in relations between assertions (if this is true, then that is true). But for the logician words need not have any meaning except as defined by other words, and the assertions need not have any relation to the world of fact. The semanticist goes further than the logician. To him words and assertions have meaning only if they are related operationally to referents. The semanticist defines not only validity (as the logician does) but also truth. The general semanticist goes the furthest. He deals not only with words, assertions, and their referents in nature but also with their effects on human behavior."

主な論点を表にまとめてみよう（表１）．

ラパパートによれば，文法学は語と語の特定の結びつきや配列が文法的に可能かどうかを追究する．文法学が語句の関係や組み合わせを規定するのに対して，論理学は文ないしは陳述といったより大きな言語単位を取り上げそれらが相互に矛盾なく，論理的に首尾一貫しているかどうかを検討する．その限りでは文法学や論理学は言語の内的構造や意味的連関の把握を目的としており，語や文が事実の世界と必らずしも結びつく必要はないわけである．それに対して，意味論と一般意味論は言語表現と現実存在との関係を問題とする．事物との対応によっ

英語第２研究室

TABLE I

DIFFERENCE BETWEEN GRAMMAR, LOGIC, SEMANTICS AND GENERAL SEMANTICS IN RESPECT TO THE SCOPE OF STUDY

Grammar	deals with	word-to-word relations	grammaticality
Logic	deals with	relations between assertions (sentences)	validity
Semantics	deals with	words and assertions in relation to referents	validity and truth
GENERAL Semantics	deals with	words, assertions and their referents in relation to their effects on human behavior	validity, truth & sanity

て言語表現の真偽性を検証する．

さて，ここでは一般意味論が他の意味論とどのように異なるかがとりわけ重要になる．一般意味論は意味論をさらに一歩押し進めた形で言語と人間行動の関係を捉えようとする．すなわち言語は思考や行動にどのような影響を与えるか，環境への適応を可能にするための言語使用はいかにあるべきかなどの問題を扱う．言語を使う主体としての人間の倫理性や健全性が問われることになる．その意味で，一般意味論は人間存在の本質に直接かかわる新しい人間科学であると言えるであろう．

ラパパートはさらに言葉を続け，言語による伝達行為を次のように定義している[3]．

"For a general semanticist, communication is not merely words in proper order properly inflected (as for the grammarian) or assertions in proper relation to each other (as for the logician) or assertions in proper relation to referents (as for the semanticist), but all these together, with the chain of 'fact to nervous system to language to nervous system to action'."

この論旨の概略を述べるならば，コミュニケーションとは，文法家にとっては正しく活用され正しく配列された語句のことである．論理学者にとっては，相互に正しく関係づけられた陳述のことである．意味論者にとっては事物との正しい対応を示す語や陳述のことである．しかし，一般意味論者にとってそれはそういう個々のものすべてが「事実――神経系――言語――神経系――行動」という一本の鎖でつながれ一体となったもののことである．この主張には，言語を静止的固定的なものではなく，動的な過程として捉える一般意味論の独自の観点が強力に打ち出されている．ことばは生きものであり，人間や環境と切り離して捉えるべきものではない．それは人間や世界と不可分の，いわば統合された実体である．言語使用と人間の生命行動との有機的な関係を問うことこそ一般意味論の重要な課題なのである．

2　一般意味論の成立と発展

2.1　本論に入る前に一般意味論の歴史的な背景と現状について一瞥したい．

一般意味論を提唱したのはポーランド系アメリカ人のコージブスキー（Alfred Korzybski）で，かれの著した『科学と健全性―非アリストテレス的体系と一般意味論』（*Science and Sanity : An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics*, Lakevill, 1933）は名実ともに一般意味論原論にあたいする名著である．一般意味論の根幹をなす考えはすべてこの一冊の本に集約されていると言っても過言ではない．800頁を超える同書に展開される独特の理論とそれを裏付けるための諸学説との照合は圧巻である．一般意味論という名称自体もその副題に由来している．同書の発刊を契機として一般意味論研究はかれの弟子たちの手により各方面に急速に広がっていった．リー（Lee, I. J.）はスピーチ・コミュニケーション論の基礎理論として一般意味論を位置づけた．ジョンソン（Johnson, W.）は一般意味論の理論と方法を言語障害者の矯正法に応用した．ミンティア女史（Minteer, C.）は一般意味論を学校教育の現場に導入した．そのほかこの一派に属する人々の中には経済学のチェイス（Chase, S.），自然科学者のラパパートなど多彩な人物が名を連ねている．日系二世のハヤカワ（Hayakawa, S. I.）もこの分野における中心的存在の一人としてその普及発展に尽した．日本における一般意味論の啓蒙にはかれの *Language in Thought and Action* が大久保忠利氏の名訳『思考と行動における言語』を得て画期的な役割を果したことは特筆すべきことであろう．

現在，一般意味論はサンフランシスコに本部を置く国際一般意味論協会（International Society for General Semantics）を中心に研究活動を続けており，その成果は季刊誌 *ETC : A Review of General Semantics* に発表されている．

一般意味論が誕生しておよそ半世紀が経過した．一時ほどの爆発的な人気こそ見られなくなったものの，言語と人間の問題に関心を寄せる多くの人々の間にしっかりと根を下ろしている．若い学問であるため，理論構成その他の点については手厳しい批判もあるが，この学問の魅力は，自己訓練のために誰でもいつでも手軽に取り組める「庶民性」にあるだろう．従来の狭い専門性にとらわれない斬新な発想と，健全性の獲得という人間にとって普遍的な問題意識が多くの人々の興味を引きつけているものと思われる．

3　一般意味論の特徴と課題

3.1　一般意味論の学問的性格を二つ挙げるとすれば，それは学際性と応用性であろう．一般意味論は，特定の意味領域にとらわれない総合的な研究の枠組をもっている．これは，音韻論や統合論を擁し近年において長足の進歩をとげてきた近代言語学諸学派の行き方と根本的に異質な点である．特定の対象に的をしぼることによって，言語音の物理的特徴，文法構造の形式的特性や意味素性などがかなり明らかにされた．さらに，言語の理性的な働らきとそれと密接にかかわる精神過程の合理性についても数多くの研究が積まれてきた．その反面，方法論的限定が「木を見て森を見ざる」のたとえのように言語の総合的巨視的扱いに欠けるのはやむをえないであろう．現実の言語は不分明で不合理な面を持っている．言語の複雑さや多様性は人間のもつ複雑さや多様性に帰因するものであろう．それは，心理的でもあるし，物理的でもある．個人的でもあるし，社会的でもある．間口が広く裾のはっきりしないのが言語の特徴である．そのようなトータルな言語に迫るには枠組を拡大し，多角的かつ弾力的な接近方法を講ぜざるをえないであろう．幅広い言語行動を問題とする以上視野をせばめることはかえって障害となるであろう．そのような考え方に基づき一般意味論はあらゆる領域にまたがる言語の問題を射程の中に包み込んでいる．事実，*ETC.* には政治学，経済学，病理学，言語心理学，言語習得論，言語教育論，文学，比較文化論などに関する論考が手広く収められ，言語とのつながりが一般意味論の視点から大胆に見直され論じられている．

創始者のコージブスキー自身該博な知識をもとに言語研究の新しい境地を開いた人である．かれは技術者の出身として数学，化学，物理学はもとより生物学，生理学，神経学などを自らの研鑽と努力を通じて究め，それらの広汎な知識の集大成として一般意味論の構想に到達した人である．ハヤカワはかれとの初めての出会いの印象を次のように語っている[4]．

“Korzybski’s ‘seminars’ were certainly not seminars in any accepted academic meaning of the term. They were unabashed indoctrination sessions, usually for six or more hours a day and continuing for several days. To me they were a fascinating experience, opening up all sorts of new areas of thought and speculation. Accustomed as I was to the strict observance of the jurisdictional boundaries of academic life, in which the professor of English never lectures on physics and the physicist never lectures on political science, I found it breathtaking to listen to Korzybski take all knowledge as his province, leaping freely from psychiatry and neurology to symbolic logic to quantum mechanics to the rise of fascism to the chemistry of colloids to cultural anthropology to non-Euclidean geometry to biologyand back to the human nervous system. Why the human nervous system? Because that’s where everything happens.” 学際研究が現代の人間諸科学における一般的な動向として定着しつつあることは周知の事実でもある．

3.2　一般意味論は学際的であると同時に応用的でもある．それは単に理論的な追求にのみ終始する学問ではなくて実際的な訓練技術としての方向を多分に持っている．このことは，効果的な話し方や聞き方などの教育訓練を通して，正しい言語習慣の育成に多くの成果を収めたことに端的に表われている．正しい言語習慣を身につけることは正常な人間関係の維持にとってきわめて重要であるとの見地から学校，病院，企業などにおける言語訓練，思考訓練に一般意味論の考え方が積極的に取り入れられた．また，吃音その他の言語障害者を対象とした病理学的な治療にも臨床的な効果を挙げている．外国語教育についても多くの示唆を含んでいるので今後この分野における研究実践が望まれている．

数々の事例から明らかなように，一般意味論は一つの経験科学として具体性実証性を重視する学問である．その理論はたえず実際に試され妥当性が検証されている．

一般意味論は以上の二つの特徴をこれまで一貫して持ち続けてきたし，今後もこの傾向をますます強めていくものと思われる．

一般意味論につけられた「一般」は伝統的な意味論と区別するための単なる符号ではない．それは研究視野の広さや弾力的な研究姿勢といったこの学問の特質と結びつけてこそ理解されるべきものである．一般意味論は周辺領域との協力を背景に，人間としての広い視点から言語行動に焦点をあてた生活科学であると言えよう．

4　一般意味論の究極目標

4.1　人間は言語刺激に対して時として物理的刺激以上に敏感な反応を示す．ことばを聞いて喜んだり勇気が出たり，あるいは逆に元気をなくしたり非常に悲しんだりする．さりげないことばが人を立ち直らせたり，あるいは立ち直れなくしたりする．コージブスキーは第一次世界大戦中に捕虜を扱った経験から多くの精神異常や疾病にはことばが深くからんでいることを発見した．かれらは盲目的にことばを信ずるあまり正常な思考力が犯されていたのである．かれはこの発見によって，人間は言語によっていかに影響を受け易い存在であるか，言語についての正しい認識がいかに必要であるかを痛感した．そしてかれの関心はかれらを社会復帰させるための精神療法的な配慮に向けられていった．

コージブスキーは人体の諸器官の中でとくに神経系の機能を重視し「一般意味論は，一般に考えられている哲学，心理学，論理学ではなく，われわれの神経系のもつとも効果的な使い方を説明し訓練する新しい外在的な学問である」と言っている[5]．人間が言語を使い思考をめぐらし行為を営むのはもとより中枢神経の働きによるものである．外界の事物や出来事から受ける刺激はここでさまざまのフィルターにかけられ一つの判断となって外に出される．これは行動主義的に捉えられた刺激と反応の仕組にほかならないが，この図式はそのまま言語の意味にも当てはまる．すなわち，言語的意味は，言語自体や先験的領域にあるのではなくて意味論的反応(semantic reaction) にあるという想定である．ある言語表現の意味は聞き手の示す反応によって特定化される．もし神経系が適正機能に欠けるならば，意味論的反応に狂いが生ずることになる．これを「意味論的機能不全」(semantic malfunctioning) という．言いかえれば，言語的意味はラパパートの説く「事実――神経系――言語――神経系――行動」との連関で捉える必要がある．そうではなくて，例えばもしそこから事実を遊離させ，ことば（語句）だけで物事を考えたらどうなるであろうか．そうすると人間はある意味で非常に迷い易くなる．なぜなら，言語によって人間の頭は非常に単純になるし画一的になるからである．「外人」ということばを聞くとたいていの日本人は一つの固定的なイメージを思い浮べてしまう．われわれの行動もこのことばの持つ既成概念になんとなく縛られてしまう．人間がとかく錯覚偏見迷信妄想に陥り易い主な原因は言語に対するとらわれにある．

コージブスキーはあらゆる精神障害や抑圧行動にこの種の意味因的 (semantogenic) 性質がからんでいると考えた．人間個人だけでなく近代社会全体もまたこの病の虜となり正常性を失っていると指摘した．そしてかれは正常性を回復するための科学的知療学としてこの理論体系をまとめ上げた．「外在的」であるための方法を人々に説き明かし，硬直化した神経系を訓練し直し精神や肉体の健全化を図ること――これがかれの大きなねらいである．そうすることによって人間の適応が可能となり一致が促進される．協力の輪を世界全体に広げていくことによって種の生存を図ることが一般意味の掲げる究極目標である．

5　非アリストテレス的思考体系

TABLE II

MAIN DIFFERENCES BETWEEN ARISTOTELIAN AND NON-ARISTOTELIAN SYSTEMS

Aristotelian	Non-Aristotelian
Intensional by definition static	Extensional empirical dynamic
Two-valued absolutism identity allness	Infinite-valued relativism non-identity non-allness
Elementalistic	Non-elementalistic integration
Un-sanity	Sanity

5.1　コージブスキーが「神経系をもっとも効果的に使う」ための具体的方策として考案し定式化したのが「非アリストテレス的思考体系」(Non-Aristotelian system) である[6]．これは西洋の長い哲学的伝統を支えてきたアリストテレスの論理と対立するものではなく，むしろそれを内に包み込むことによってそれをのり越えようとする大胆な試みである．表2は両者の比較をまと

めたものである.「反（Anti-)」ではなく「非（Non-)」となっているのは次の図1に示されるようにこの二つが包摂の関係にあることを表わしている

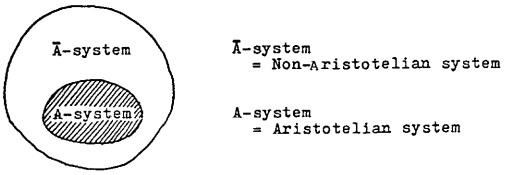

FIGURE 1

RELATION BETWEEN ARISTOTELIAN AND NON-ARISTOTELIAN SYSTEMS

アリストテレスの論理は次のような三つの思考規則から成っている.

(1) AはAである（A is A).

(2) すべてのものはAか非Aかのどちらかである（Everything is either A or not A).

(3) いかなるものもAであり非Aであることはできない（Nothing is both A and not A).

これらはそれぞれ同一律（law of identity), 排中律（law of the excluded middle), 矛盾律（law of non-contradiction）と呼ばれている. この三つの規則にかなった思考が論理的な思考と考えられている. AをAと名づけること自体すでに一切の非Aを排除することになるからそこに矛盾の入り込む余地はない. われわれが演算したりある種の証明を行なう場合には暗黙の前提としてこの規則に従っているのである.

しかし, これは物事を総じてAか非Aかに決めてかかる二者択一の論理であり, 千変万化する現実を生きぬくにはあまりにも窮屈な論理ではないだろうか. 人間は実験的に設定された一定の条件のもとに生きているのではない. とくに社会構造の複雑化が進み人間関係や価値観が多様化している現代において「Aが非A」であるような矛盾や不合理が満ちている. AをAと分類する基準そのものが根底から揺り動かされくつがえされる時代である. AがAでありつづける保証はない. したがって, このような流動的な現実に対処していくためにはプラスかマイナスかの二価値論理だけではあまりにも単純すぎる. それは排他的独断的な評価態度を生み, 人を両極的な行動に走らせ易い. それは神経系の硬直化を引き起こし異常をもたらす不健全の論理と言わなければならない.

一方, コージブスキーの唱える非アリストテレス的思考体系は多価値論理に基礎を置いている. それは, 物事の多様性を認め, 程度や変化をきめ細かく見きわめようとする緻密な論理である. コージブスキーは人間を「一個の全体としての有機体」(an-organism-as-a-whole) と定義した. この見解は人間を, たとえば二元論的に精神と肉体に分けたり, 環境から孤立させることを否定する. ことばの上でならそれも可能だが, 現実の人間はそう単純に割り切れるものではない. 時間や場所の影響を無視することはできないし, 環境要因の働きかけもある. 極端な言い方をすれば,「昨日の敵は今日の友」, あるいはその反対もありうる. 人間もまた不断の変化の過程にある相対的な存在なのである. 環境の中で相互に関連し合う統合的な一個の全体（an integrated whole）なのである.

一般意味論はそのような非要素主義的な人間観や現実認識に立脚している. われわれ現代人にとっては先験的絶対性よりも経験的相対性を選んだ方がより賢明であろう. しかし, このことは最終的な意志決定を迫る現実の問題に対して二価値論が有効であることを否定するものではない.

次に, 一般意味論はどのような言語観を基盤としているかを述べることにする.

6 一般意味論の基本原理

6.1 コージブスキーは事物に対する言語の関係を, 現地に対する地図の関係にみたてこの比喩を好んで使った. そして「地図はそれが表わす現地ではない」(The map is not the territory it represents.), 同様に「ことばはものではない」(The word is not the thing.) と繰り返し説くことによって両者のちがいを強調した. この二つは混同されるべきではないと言った. これを「非同一性の原理」(principle of non-identity) という. これが第一の原理である.

地図が現地を表わすように言語は事物を表わしている. 地図が正確なら誰でもそこにおおむね共通の情報を読みとるであろう. 言語も一定の記号過程に基づいて事物と結びついているので, 正しい対応を示す限り誤解は生じないはずである. 言語が社会的な情報伝達手段となりうる基盤もこの象徴作用にある. 地図の良し悪しは現地との照合によって決定される. 言語の価値も特定の事物を喚起する有力な媒体になりうるか否かにかかっている. この働きの点では両者は共通している.

ところが，どんなに詳細をきわめた地図でもそれを現地と混同する人はいないであろう．「百聞は一見にしかず」でこの二つは判然と区別されちがいが意識されている．それに対して言語の場合はその区別が判然としているとは限らない．自明と思われる次元のちがいが，頭ではわかっていても無意識のうちに見落され，とかく言語を事物とすりかえている場合が多い．コージブスキーは「現地≠地図」という明解な公式を使って言語と事物のちがいを人々に類推させ認知させようとしたのである．

このような記号論はとくに目新しいものではない．言語と事物，「表わすもの」（音声や文字）と「表わされるもの」（事物や概念）との関係が偶然か必然かをめぐる論争は古くから続いており言語論や文化論の根本問題になっている．偶然説を支持するのがソシュール（F. de Saussure）以来の近代言語学の基本的立場であるし，一般意味論もこの言語観に負っている．それによると，言語と事物との関係は一種の約束事であり慣習的恣意的な結びつきによるのであって，特殊な現象を除けばその間に必然的な連関はないはずである．

ところが人はことばがものであるかのように振舞っている．思考や行動が言語に引きづられ色づけられている．言語迷信や言語崇拝が近代人の中にも根強く残っているし，言語に強制された記号行動の例には事欠かない．言語が事物との間隙を飛び越えて一人歩きをしている現実を無視することはできない．その原因を探っていくと言語についての誤った考え方があることにコージブスキーは気がついた．かれはそれを改めない限り言語の呪力から逃れることはできないと結論し，ことばの落し穴に落ち入らないための安全弁として三つの基本原理を提示した．これは非アリストテレス的思考体系を実際の言語行動に実現する際に強力な手段となるものである．

6.2 第二の原理は次の二つの命題から成っている．「地図は現地の全てを表わさない」(The map does not represent all of the territory)．「ことばはものの全てを表わさない」(The word does not represent all of the thing)．これは第一原理と表裏を成し，どんなに多くのことばを費してものすべてを言いつくすことはできない，ことばの裏には見落され，切り捨てられた何かがあるということを意味している．これを「非全体性の原理」(principle of non-allness) という．現地のすべてを地図に盛り込むことができないのと同様に言語表現にも何らかの選択が行なわれている．言語の有限性をわきまえている人は相手のことばをうのみにしたり，それが事実の全てであるというような思いこみをしない．「信号反応」(signal reaction) いわゆる条件反射に対して間をおいた反応を「遅延的反応」(delayed reaction) という．この種の反応は言語の絶対視を防ぎ，その中に潜む虚偽や魔術を見抜くゆとりを与える．言語と人間の不完全性を知るときおごり高ぶりが消え，人は事実に即して謙虚に語るようになる．このような言語習慣や思考方法を修得し行使することによって気持が安定し，人間的な成熟が得られる．

ことばとものを短絡させることを「同一視反応」(identification reaction) というが，これは一般意味論の中心概念の一つとなっている．同一視反応は単に狂信的で，妄想にかられ易い人や強迫観念にかられている人，被害者意識の強い人だけに見られる現象ではなく健康な人でもかかる心の病気である．人は誰でも反応型（reaction pattern）というものを後天的に獲得している．ある人に固有の反応型というものはその人の過去の経験に基づいて形成されたり，社会通念や行動様式，状況倫理，日常言語の非科学性などの原因によって生み出される．さらにその根本には「名は体を表わす」という言語についての無意識の前提がある．たとえば，アメリカのかかえている深刻な社会問題の一つに人種問題がある．「黒人との混血を黒人とみなすなら，白人との混血を白人とみなしてもよいではないか」という論法は多くの白人には通用しない．黒人との混血はその血がたとえどんなに薄くても黒人であって，黒人とみなすかみなさないかの問題ではもはやなくなっている．「黒人」だから黒人なのである．白人にとっても，また白人とほとんど見分けのつかない黒人にとっても「黒人」ということばは言語の次元を飛びこえて不幸な現実そのものに同一化してしまったのである．したがって，白人―黒人という二律背反的な言い方しか依然として許されないのである．

6.3 第三の原理は「自己再帰性の原理」(principle of self-reflexiveness) といわれるものである．「地図は自己再帰的である」(The map is self-reflexive)．理想的な地図はその中に縮小された地図を包含している．その地図はその中にその地図のさらに縮小された地図を包含している．この自己縮小の過程は理論的には無限に続く．その過程で細部が次第に欠落していき，小さな点となりやがては消えてなくなる．これと同じように言語も自己反射的な性質をもっている．言語は事物を表わす

だけでなく言語自体について語ることができる．何度でも自分にはね帰る性質を持ち続ける．つまり，「ことば1」をもとにして「ことば2」，「ことば2」をもとにして「ことば3」という具合にはてしなく自己再生産していくことができる．外界の事物や経験を対象化し指示する言語（「ことば1」）を対象言語（object language）といい，それを言いかえる言語（「ことば2」）をメタ言語（meta-language）という．メタ言語による言いかえはさらに高い階層のことばによる言いかえと無限に続くが，この過程で必然的に起こる現象が抽象化(abstraction）である．抽象度が高くなればなるほど情報量は増大していくが，その反面対象言語の特質が失なわれていく．したがって，メタ言語が事物を表わすかのように単純に考えてはならないのである．

7　具体的装置

7.1 以上の三つの言語的特性，とくに第三の特性をわかり易く説明するためにコージブスキーは「構造微分」（Structural Differential）と呼ばれる構造図を考案した[8]．これは，現象世界をことばに取り組む際の記号過程を描いたものである．（図2）

この図を簡単に説明してみよう．図の一番上の放物線によって描かれた半球状のものは純粋に客観的な世界を表わしている．電子や原子などの物理・化学的素性が渦

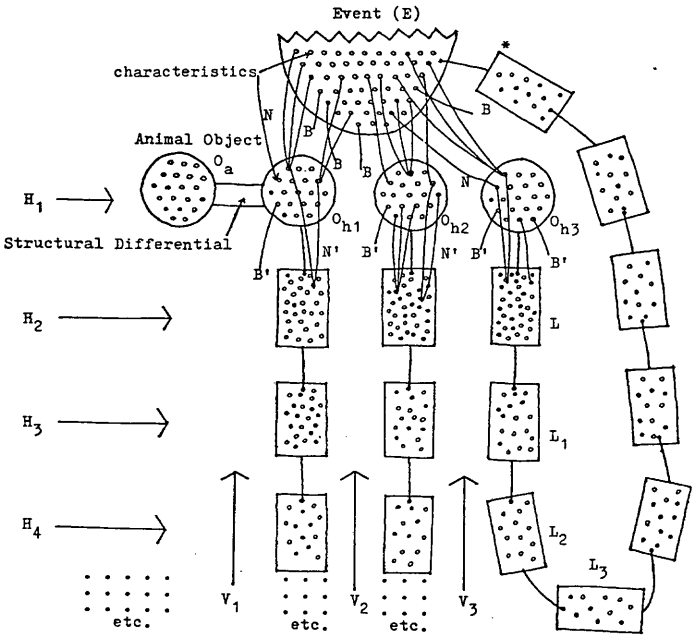

FIGURE 2

THE STRUCTURAL DIFFERENTIAL

Symbols: O_a = Animal object; O_h = Human object; L (L_1, L_2, etc.) = Label; N, N' = Nervous process of abstracting; B, B' = Characteristics left out in the process of abstracting; H (H_1, H_2, etc.) = Horizontal difference; V (V_1, V_2, etc.) = Vertical difference.

* The last tag attached back to the event indicates that the characteristics of the event represent the highest abstractions we have produced at each date.

巻く「出来事」(event) の世界である．上部の波線はこの活発な運動が無限の広がりをもつことを意味している．半円の中の小さな丸は出来事のもつ無数の特徴を表わしている．この過程は直接肉眼では捉えられない「ものそのもの」の世界である．その下にある大きな丸が人間の直接認識の対象になるものであって，この丸は有限の大きさをもつ物的対象 (human object) を表わしている．人間の神経系の第一次抽象の結果Eの段階の多くの特徴が捨てられ（紐が宙に浮んだままになっている），有限個の特徴（紐によって上下が結ばれている）だけが拾い上げられる．この段階が人間にとって外在的世界となるところのものである．動物もまたこの次元に住んでいるが，言語を操ったり抽象作用を営むことができないので，動物的世界は人間的世界の左側に示されている．

この外在的世界に対して内在的世界とは言語的世界のことである．L(＝Language) と表示された段階から下はすべて言語的段階である．第二次，第三次と順次抽象化が進むにつれて推論が加わりより高次の抽象概念が導入される．そしてそれがふたたび循環的に「出来事」に結びついていく．

7.2 この仕組をさらに見易く図案化し，実際にことばを使って例証しているのがハヤカワの「抽象のはしご」(abstraction ladder) である[9]．（図3）

レベル1は過程のレベルで現代の科学だけが入りこめ

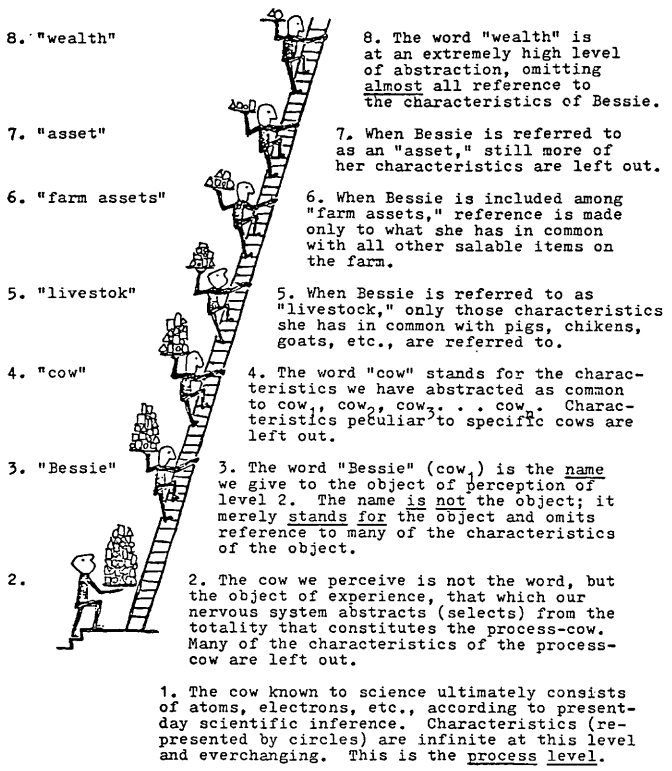

FIGURE 3

ABSTRACTION LADDER

Start reading from the bottom UP

る世界である．レベル２が対象の世界でここに一頭の動物が登場する．レベル３の言語的レベルにおいてこの動物にはじめて「ベッシー」という名前がつけられる．次のレベルにおいて推論が加わりベッシー，キャッシー，スージーなどと共に「牝牛」という類にまとめられる．そのように「ベッシー」を起点として階段は下から上に向かって登っているが次の「家蓄」という一般的なカテゴリーになると家で飼育されている馬やにわとりとの類似性は言及されるものの牝牛としての個別性は影が薄くなる．「農場資産」とそれとからめた「富」というさらに包括的なカテゴリーになると現実存在としてのベッシーから遠くへだたり，個物としてのベッシーの特徴はことごとく色あせ消えうせてしまう．すなわち，下位概念から上位概念に進むにつれて抽象の度合いが増し，それにひきかえ，ことばの指示機能は低下する．

われわれはこのような次元のちがいを知り，それぞれの次元に適応していかなければならない．たとえば，次のようなやりとりに次元の混乱が顕著に見られる．大学教育の目標の一つは，人間を知ること，人を見る目を養うことであると説いている先生がここにいるとする．その先生に向かってある学生が「大学では知識だけでなく知恵も教えるのですか」と質問する．なかなか的を得た質問なのだが先生はそうきかれると思わずかっとなってこうやり返す．「君は，大学に来ても無駄だと言うのか」．また，話すことだけが重んじられとかく看過されがちな聞くことの重要性について話している人がいるとする．その人に向かって「聞く人ばかりいたら話す人がいなくなってしまうではないか」と反論するのも同断である．

こうした議論には論理の飛躍と同時に両極的な発想が含まれている．同一視とは抽象のレベルを無視することによって引き起こされる不適応性のことである．

われわれは言語の非同一性，非全体性，再帰性をたえず想いおこすことによって，ことばとものの本質的なちがいを認識し，事実に即したものの考え方やことばの使い方をしていかなければならない．必要ならば対象のレベルに立ち戻り，事物に還元することによって推論の是非を確かめなければならない．事実に立脚した考え方のことを「外在的思考法」（extensional orientation）という（表２参照）．外在的思考法を会得することによってわれわれは過度の一般化をさけ，「絵にかいたもち」に飛びつかなくなるであろう．“Find the referent!”が一般意味論の合言葉になっている．

8　外在的工夫

コージブスキーは構造微分により一般意味論の根本原理を視覚化したが，これを補完するてだてとして次のような指針を設けた．そして，言語生活における適応はいかにして可能か，われわれの評価態度はいかにあるべきかを教えている．

8.1 指数（index）「Ａ１はＡ２ではない」．Ａという記号に固執するならば同一律「ＡはＡである」は正しい．ＡはＡに他ならない．しかし，この記号が指し示す外在的事実に注意するなら同じＡでもＡ１とＡ２には微妙な差が認められるであろう．具体的インパクトはそれぞれ違うのが当然である．Ａという記号だけで判断し行動することは危険である．すべての名称に指数をつけて理解することは，共通性だけでなく個別性を捉える利点がある．この評価手順をもつことによってわれわれは「似て非なるもの」を見分け，安易な同一化をさけることができる．

8.2 日付（date）「A1970はA1980ではない」「十年一昔」というが，Aに対する10年前の評価は今日ではもはや通用しないかもしれない．一度ついてしまったレッテルや汚名を払拭することはむづかしい．言語や観念はとかく事物を静止したものと捉えがちだからである．すべての名称に時間差を設けることによって時々刻々変化する客観的状況に対処することができる．

8.3 など（etc.）ことばの非全体性に注意しよう．ことばには含みがあることも銘記すべきである．すべての名称や陳述の末尾に「など」をつけることによってふるい落された特徴をすくい上げることが大切である．人は，ことばの明示的意味（「メッセージ」）よりも表現しつくされない暗示的意味（「メタ・メッセージ」）に反応する場合が多い．

8.4 引用符（quote）　日常語は科学用語と異なり意味規定があいまいであったり，使う人によって特殊な意味づけがなされていることが多い．このことを意識しなくては解釈や判断を誤ってしまう．とりわけ，抽象語や着色されたことばは括弧づけにして筆者の個人的脈絡に注意を促がす必要がある．

8.5 ハイフン（hyphen）　時間や空間は切れ目なく続いているが，言語はこの連続体に境をつけ，切り取る働きがある．もしも本当の内容に注意しようとするならわれわれはことばをつなぐべきである．そして，要素間の

つながりを捉え，現実の姿にできるだけ近いものを再構成すべきである．断片的な言語で連続的継起的な世界を表わす装置がハイフンである．

9 結　　語

現代は情報化時代といわれてから久しいが，言語不信の時代であるともいわれている．この不信感の原因は一体何であろうか．その根はかなり深いものと思われる．

周知の通り，マス・メディアは「多々増々弁ず」の傾向を日夜あおりたて，おびただしい言語洪水を引き起こしている．人々は否応なく「コトバのナイアガラ」に投げこまれ，その大きな渦に飲みこまれんばかりである．そして，言葉の異様な氾濫の中で，事実のすりかえや歪曲がいたるところで平然と行なわれている．黒を白にぬりかえる説得術や操作術がもてはやされ，プロパガンダがはびこっている．同一化や抽象化がまかり通り，好き勝手な推論や断定があとをたたない．このような風潮は，言語に対する懐疑心をあおりたてるだけでなく，人間そのものに対する信頼の念をみすみす失なわせずにはいないであろう．情報過多がかえって人と人とのコミュニケーションを途絶えさせ，正常な人間関係を窒息させるとは皮肉なことである．言語は汚染され有毒物質に変質しててしまったのであろうか．われわれは，何が真実なのか，どこまでが事実なのかわからないまま情報の波に押し流されてしまっている．一般意味論が警告するように，ことばとものの関係がますます見きわめにくくなってしまったし，言葉に対する新鮮な驚きと感動はわきがたいものになってしまった．その意味では，マス・メディアだけでなく，言語を生活の糧とするわれわれの責任も重いと言わざるをえない．

その成立の当初から人間的本質と表裏をなしていたはずの豊かな言語が，人間に背き，人間を落し入れる危険な存在になり下ってしまったのだろうか．このような人間不在の言語に無反省に浸っているかぎり，現代の言語病理はいやされないであろう．その原因を徹底的に究明し，言語本来の姿を再生することが今こそ必要な時である．「時間空間を結ぶ言語」によってこそ人間は過去の知的遺産を受け継ぎ，新たな価値の創造に立ち向かうことができるのである．健全で秩序ある言語状況を作り出すために一般意味論の知識を役立てるべき時がきたのである．人間として広い視野から言語を捉え，よりよい言語観をつくり上げる姿勢を養うことが肝心である．そのようにまず自らを再教育しなければならないだろうし，その成果はもっとも身近な人と人とのコミュニケーションにおいて生かされねばならないだろう．これこそ，コージブスキーの意図した庶民の科学である．「Aは非Aである」ような混乱した今日の社会状況の中に生きるわれわれにとって一般意味論は「第三の意味論」としてますますその存在意義を深めていると思われる．

註

(1) 池上嘉彦『意味論』大修館，1975，18-35頁．

(2) Rapoport, Anatol, " What is Semantics?," in Hayakawa, S. I.(ed.), *The Use and Misuse of Language*, Greenwich, Conn.: Fawcett, 1962, p. 22.

(3) Rapoport, Anatol, *loc. cit.*

(4) Hayakawa, S. I., *Through the Communication Barrier, On Speaking, Listening, and Understanding*, Harper & Row Publishers, New York, 1979, p. xiii.

(5) Korzybski, Alfred, *Science and Sanity, An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics*, Conn.: The International Non-Aristotelian Library Publishing Company, Fourth Edition, 1958, p. xxvi. "General semantics is not any 'philosophy', or 'psychology', or 'logic', in the ordinary sense. It is a new extensional discipline which explains and trains us how to use our nervous systems most efficiently." 本稿の論述はおおむねコージブスキーの同書に負っている．一般意味論の哲学的背景や影響，すなわちプラグマティズムの哲学や操作主義哲学，行動主義哲学との関連については紙面の都合で割愛した．なお，一般意味論の言語研究の実際については稿を改めて論ずることにする．

(6) *Ibid.*, pp. xl-xlii, et al.

(7) *Ibid.*, p. 97.

(8) *Ibid.*, p. 396.

(9) Hayakawa, S. I., *Language in Thought and Action*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1978, 4 th ed., p. 155.

参考文献

1. Bois, J. Samuel, *The Art of Awareness*, Iowa: Wm. C. Brown Company Publishers, 3rd ed., 1978.
2. Carnap, R., *Introduction to Semantics*, Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1942.
3. Chase, Stuart, *The Tyranny of Words*, New York: Harcourt, Brace & World, Inc. 1938.
4. ————, *Power of Words*, New York : Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1954.
5. Hayakawa, S. I., *Symbol, Status, and Personality*, New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1953.
6. ————, (ed.) *Language, Meaning and Maturity: Selections ETC. 1943-1953*, New York: Harper and Row Publishers, 1959.
7. ————, (ed.) *The Use and Misuse of Language*, New York: Fawcett, 1962.
8. ————, *Language in Thought and Action*, New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 4th edition, 1978.
9. ———, *Through the Communication Barrier*, New York: Harper & Row Publishers, Inc., 1979.
10. 池上嘉彦『意味論』大修館，1975.
11. 井上尚美『言語・思考・コミュニケーション』明治書院，1972.
12. 井上尚美・福沢周亮・平栗隆之『一般意味論』河野心理教育研究所，1974.
13. 石橋幸太郎編『現代英語学辞典』成美堂，1973.
14. Johnson, Wendell, *People in Quandaries: The Semantics of Personal Adjustment*, New York: Harper & Row Publishers, 1964.
15. Korzybski, Alfred, *Science and Sanity: An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics*, Lancaster, Pa. : Science Press Printing Company, 1933. Conn. : The International Non-Aristotelian Library Publishing Company, 4th edition, 1958.
16. Lee, Irving J., *Language Habits in Human Affairs*, New York: Harper & Row Publishers, 1941.
17. Leech, G. N., *Semantics*, Hammondsworth: Penguin Books Ltd., 1974.
18. Lyons, J., *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press, 1968.
19. Minteer, C., *Words and What They Do to You*, Evanston: Row, Peterson & Company, 1953.
20. 森岡健二・藤永保『言語と人間』東海大学出版会，1970.
21. Ogden, C. K. & I. A. Richards, *The Meaning of Meaning*, London : Routledge & Kegan Paul, 1923.
22. Rapoport, Anatol, "What is Samantics?," Hayakawa, S. I. (ed.) *The Use and Misuse of Language*, Greenwich, Conn. : Fawcett, 1962.
23. 齋藤美津子『話しことばの科学』サイマル出版会，1971.
24. ———『きき方の理論』サイマル出版会，1972.
25. ———「一般意味論の現代性」『言語』(11月号) 大修館，1977.
26. Wittgenstein, L., *Philosophical Investigations*, Oxford: Basil Blackwell, 1953.
27. 横尾信男「一般意味論」伊藤克敏編『新言語学入門』三省堂，1985.
28. *ETC. A Review of General Semantics*, (quarterly) San Francisco : International Society for General Semantics.

［英文抄録］

Alfred Korzybski (1879-1950), a Polish-American scholar and engineer, formulated and developed a doctrine called "general semantics." He set forth the main postulates of general semantics and its object of study in his book entitled *Science and Sanity : An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics* (1933), which was intended to be a "textbook showing how in modern scientific methods we can find factors of sanity, to be tested empirically." The present paper aims to introduce the underlying assumptions of general semantics with special reference to his book and evaluate its new line of research on the problems of language in relation to human thought and action.

In his view, general semantics is neither philosophy nor psychology nor logic in the ordinary sense, but it is a "new extensional discipline which explains and trains us how to use our nervous systems most efficiently." In other words the ultimate goal of general semantics is to construct programs for retraining human nervous systems toward more hygienic linguistic habits. To achieve this goal, he invented non-Aristotelian systems of evaluation, which lead us to *extensional*, *multi-valued*, *non-elementalistic*, and *sane* orientation of mind and action. What Korzybski aimed at is to establish the science of man as an integrated whole.